

# 巻頭言

むなかた電子博物館紀要委員会

委員長 平井 正則

平成 29 年度世界遺産登録を目指す「神の島」宗像・沖ノ島と関連古墳群「景観と調和した世界遺産のまちづくり」シンポジウムが、3月18日メイトム宗像にて開催されました。市民の皆様による議論は多種多様で大変にぎやかなものでした。主催者である宗像市世界遺産登録推進室によると「世界遺産の目的は、資産の保護と資産周辺の景観や環境を保全し、将来世代に残していくことです。その一方で、住民の生活や観光の両立など様々な課題も」とあります。この世界遺産登録は、宗像市域に限らず、津屋崎古墳群、宮地岳神社を含めてのものとして聞いています。沖ノ島の壮大な歴史が展開された時代には、宗像市や福岡県という境界があったわけではありませんから、どこの主導かといった瑣末な点に拘泥することのない、市民とともにある運動こそが、世界遺産登録に向けた重要な役割を果たすことでしょう。

我々協働団体むなかた電子博物館もこの運動の一端を担っていると自負しています。そのひとつとして、「北斗の水くみ」という現代の新しい“神話”（ロマン）をテーマに、観望会や写真展の取組みを行い、宗像市による「北斗の水くみ海浜公園」の設置などの環境整備を後押ししながら、世界的にも珍しい夜空の景観を注目してきました。これらの活動もあって「北斗の水くみ」の存在は広く知られつつあります。一方、近年の宗像市の目覚ましい発展は、周辺でのヒートアイランド現象を招き、主に交通量の増加に伴う上空塵の停滞と燈火の増大に起因する、すなわち「光害」により、夜空が明るくなりつつあります。実は「北斗の水くみ」観察は宗像光害の検証にも寄与するのです。いつまでもクリーンな空と自然の夜空に壮大な「北斗の水くみ」の景観を残したいものです。ただ、世界遺産登録を目掛けたささやかな我々の取り組みに対して、若干評価が低いのは残念至極です。今後、我々の活動とその価値を広くお伝えしていくとともに、一層の評価のある活動となるよう努力したいと考えています。

むなかた電子博物館の電子的紀要掲載は今年7号となりました。印刷の場合、原稿量が増えると費用もかなり嵩むのですが、電子文なら、編集は大変ですが、投稿の著者にとって重要と思われるものを、その原稿量を気にせずに書いて頂くことができました。

一読後、読者の皆さん方の自由なご意見を紀要にお寄せ下さい。

次年度はむなかた電子博物館全体の見直しも検討するという議論が進んでいます。関心ある市民の皆様が是非この活動に参加頂き、益々活動の発展をお願いする次第です。